キム・キョンファ（KIM Kyunghwa ）

韓国晋州出身、現在釜山を拠点とする美術作家。韓国慶星大学美術学科卒業、ソウル大学大学院彫塑科卒業。主な展覧会は 2020 年「釜山：視線と観点」（F1963 / 韓国釜山 ）、「逆または正し見方－コペルニクス想像の遊び」（ 釜山教育庁創意工作所 / 韓国釜山 ）、美術その名で一つになる ... Ⅱ（ 釜山大学アートセンター / 韓国釜山 ）、2019 年「楽しい芸術旅行 - 旗設置展」（ 影島大橋 / 韓国釜山 ）、秋の種 2019（ ギャラリー港民館 / 福岡 ）、2018 年 光州ビエンナーレ「想像された境界に」（ACC 韓国光州 ）ほか。

朝鮮朝鮮時代（1392~1910 年 ）の絵画形式である「チェッコリ（ 冊巨里 ）」は「書架図」「冊架図」または「書架文房図」とも呼ばれる。本と文房具類を基に吉祥の意味を持った花や果物、野菜、動物など、庶民の願いと象徴が含まれている民画の形式である。逆遠近法に描かれたチェッコリ図は、西洋画の遠近法に見慣れた、私たちには多少、非合理的に見えたりもする。遠近法的形式が主体中心の近代世界を見る方法であれば、目に見える対象を中心とした知覚方式がむしろ近代を超えている。これらの形式を用いて、捨てられるダンボール箱に絵の具で着色し、立体的に再構成した。

チェッコリ _120 × 90cm_ 使い捨てダンボールに彩色 _2018

ユン・ピルナム（YOON Pilnam）

韓国釜山出身、現在釜山を拠点とする繊維美術作家。韓国東亜大学芸術大学繊維美術科卒業後、同大学大学院応用美術科卒業。主な展覧会は 2020 年「釜山：視線と観点」（F1963 / 韓国釜山 ）、「厳弓洞物語」（ ビオンフ / 韓国釜山 ）、2019 年 秋の種 2019（ ギャラリー港民館 / 福岡 ）、2018 年「豊かな秋」（ 捧下橋 / 韓国金海 ）、「極めて私的な」（ 釜山私立美術館 / 韓国釜山 ）、「子ども美術遊び場」（ 釜山民主公園 / 韓国釜山 ）、「沈黙を揺する」（40 階段文化館 / 韓国釜山 ）、2016 年、釜山ビエンナーレ「Hybridizing Earth, Discussing Multitude」（F1963 韓国釜山 ）ほか。

いつからか、体を動かして時間と集中力を要する事で、可能となる肉体労働は、その貴重な価値が失っている。今の労働はデジタル端末機の干渉の中で遅れる未完で留まる疲れてしまうものになってしまった。精神の覚醒中に、肉体は重みになって、肉体の慣性の中で、精神は雑音になる。それにもかかわらず、現実の世界を動かして、回復させる力は相変わらず労働から出てくる。これらの日常の溜まらない流れを時間と労働が必要な、重畳された針仕事を通じて話しようとする。

Meditation（ 花木の向うに ）132 × 104cm 綿、シルク、綿糸 2006

キム・ボムス（KIM Boemsoo）

韓国全南出身、現在釜山を拠点とする絵画作家。韓国新羅大学絵画学科、釜山大学大学院美術学科卒業。主な展覧会は 2019 年 個展「いつもあなたのそばに」（SPACE UM / 韓国釜山 ）、2018 年 個展「顔－その正体性を聴く」（Mi kwang Gallery / 韓国釜山 ）、2017 年 個展「微細な感覚の疏通」（SPACE UM / 韓国釜山 ）、2015 年「対馬アートファンタジア 2015」(対馬･アートセンター / 長崎対馬)､「リサイクルングアート」(釜山市庁ギャラリー / 長韓国釜山) ほか。

私は人々の顔を描く方法で通じて、間接的に自分のアイデンティティを見つけていくように他人と自画像を描きながら「自分自身を見つめる」さまざまな方法を提案して表現している。

笑おうよ！ 130 × 130cm acrylic on canvas 2018

キム・スジョン（KIM Sujeong）

釜山大学美術学科（彫塑専攻）を卒業した後、現在釜山を拠点とする美術作家であり、釜山のアートオルタナティブスペース〔Youngju mansion〕を運営管理している。人生を貫通する壮大な「愛」が個人を揺るがす過程、理由、目的、犠牲に集中して作品を制作している。主な展覧会は 2020 年 個展「Love or Death」（スペースクリップ / 韓国釜山）、2019 年 個展「愛は消えません！」（Youngju mansion / 韓国釜山）、2017 年 個展「愛と戦争は手段を選ばない」（空間 him / 韓国釜山）ほか。

世界の歴史の中で、数多く現れる愛と死の作品イメージから抜き出したコラージュ作業である。作業に使われた愛と死をテーマにした数多くのイメージは、それぞれ別の話を内包している。愛、または死というテーマを共有するが、異なる話はコラージュを通じてイメージが合体される。違うの物語として描いた絵が集まって一つの新しい物語を発信する。合わされたイメージから愛と死という二つの単語が互いに振り返ったままくっ付いていることを示している。

Love or Death_150x400cm_print on canvas_2020

ムン・チヨン（MOON Jiyoung）

現在釜山を拠点とする美術作家。釜山大学大学院美術学科（西洋画専攻）を卒業、主な展覧会は 2019 年 個展「膝で積むキャンディ」（space dot / 韓国釜山）、2015 年 個展「通常の条件」（釜山大学アートセンター / 韓国釜山）、2020 年 若い視覚・新しい視線「見知らない所に立つ」（釜山市立美術館 / 韓国釜山）、2020 年「ゆううつですか？」（ソウル大学美術館 / 韓国ソウル）、2020 年 コレクション展「今日の質問」（釜山現代美術館 / 韓国釜山）、2020 年「見たい顔」（李韓烈記念館 / 釜山など）ほか。

＜母の神殿＞シリーズは、原因を知らない不当なことを繰り返す経験をしたり、自分の意志で決定することができるものに限りがある女性の生活の中、宗教や祈りなどの行為しか出来ない状況を表している。特に結婚後の女性は、個人という認識ではなく、「家庭」という集団認識として家族のため、自己決定権を持つ事が出来ない存在となる。煩雑な日常の中でも、自分だけの神殿に整え、家族のため祈りを止めない母の姿は、一方でゾッとする母性でありながら、同時に最も積極的な抵抗にもなる。

母の神殿 III_For what the woman prays_ 162.2 × 130.3cm_ oil on canvas_ 2019

パク・キョンヒョ（PARK Kyunghyo）

現在釜山を拠点とする美術作家・絵本作家。東亜大学芸術大学絵画科を卒業。釜山大学校文化芸術映像媒体協同過程大学院修了。現在、釜山民芸総会員・釜山児童文学会 視覚芸術委員会の代表。主な展覧会は 2020 年 民衆美術 2020「民衆美術家列伝」（釜山民主公園 / 韓国釜山）、2020 年「5・18 4040 ポスター展」（ギャラリーセンガクさんざ / 韓国光州）、2019 年 民衆美術 2019「呼吸から叫び声に」（釜山民主公園 / 韓国釜山）、そして出版物として 2020 年『山は生きている』、2019 年『大蛇の新郎』、2018 年『口が肛門に』ほか。

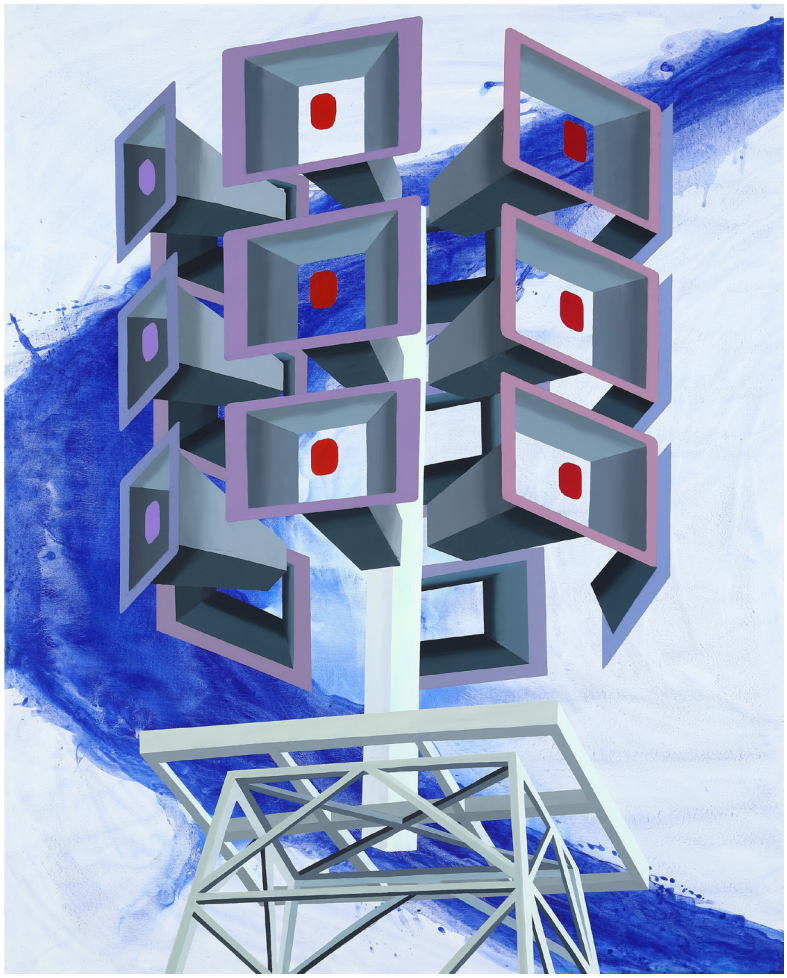
映画「2001 年宇宙の旅」をパロディにした絵画 2 点である。映画は原始の過去と宇宙の未来に備えて時間的、物理的な距離に基づいて［進歩とは何か？ ］という質問を基盤にした映画である。今では非常に近い現実になっている人工知能である「HAL9000」と人間の死闘が繰り広げられる。人間の感覚的感性的な人生の意味を無視して、HAL9000 はある目的（事前に設計された）を向けた進歩の歩みを人間に強要する。1968 年人間が月に着陸をする一年前の未来に関する想像は美しく神秘たが、暗鬱だった。彼らが見た 2000 年から 20 年が過ぎた今では、少し別の理由で暗鬱である。人工知能もどうしようも出来ないコロナウイルスによる生態的な危機が、異性を通じた現代科学の発展を成し遂げた西欧がもっと悲惨である。ここで私はより人間的で単純で共感できる媒介を探そうと思った。宇宙人たちが食べる様々な味の飲料よりも刺激的で、美味しいインスタント食品を代表するの「プルダックポックンミョン（激辛焼きそば）」である。人間は進歩の差別よりも、最小限の共感が優先である。作品を制作する意図として「HAL9000」より「ハーハー 9999」に変換して、楽しんでの刺激と共感の辛さ NO「神」を奉じて、2020 年のウイルスからの生態危機の方策を議論し合う序論である。

民中味術は辛い！ 130 × 162cm_
acrylic on canvas_2020

Oh My 辛 _162 × 130cm_acrylic on canvas_2020

パク・シンヨン（PARK Sinyoung）
現在釜山を拠点とする美術作家。ソウル弘益大学東洋美術学科を卒業、フランス Ecole des beaux art de Marseille と同大学大学院卒業、主な展覧会は 2019 年 個展「見えない音」（フランス文化院 art space / 韓国釜山）、2018 年 個展（MIBOO art center / 韓国釜山）、2017 年 個展「Fluence」（Valerie Delaunay gallery / フランス Paris）、2017 年「Le jeu des affinites non elective」（フランス韓国文化院 / フランス Paris）、2017 年「Grand Trouble」（La Halle Saint pierre / フランス Paris）、2017 年「Statu Quo」（Maison des art et loisir de laon / フランス Laon）、ほか。

私は実際のイメージと架空のイメージを混合させて作品化しています。どうイメージを表現して構造化させ、または交差させて制作するかに関心を持っています。虚像的な記憶は、視覚だけでなく、聴覚的に拡げる試みをしてみました。この作品は 2019 年に釜山、フランス文化院アートスペースで個展として発表した作品です。日常で体験した感情を視覚的な作業に移った時、現実には、その時間も画像も、もはや存在していません。
私は制作しながらその音を想像し、虚空に散らばった無数の音を取り出し、内側の記憶を現実的な形として移しました。そのような感情は一瞬の爆発して、風を作り出しました。存在しない音は、色の動きに乗って、作品の外に向いています。

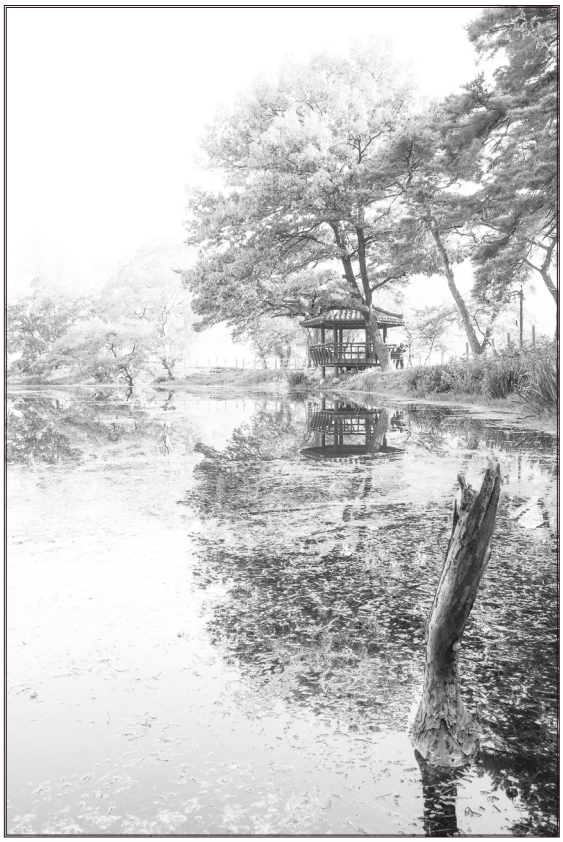


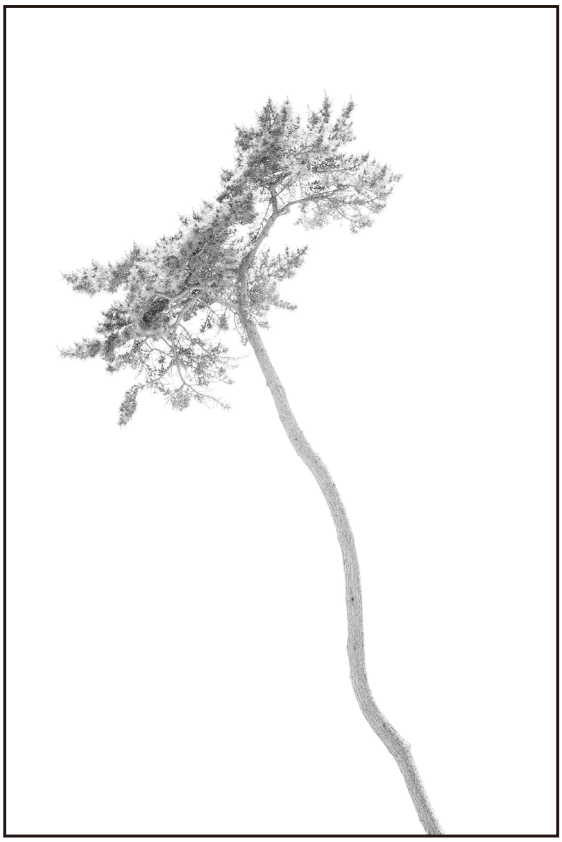
Untitled_acrylic on canvas
_160x130cm_2018

プリヤ・キム（Priya KIM）

現在釜山を拠点とする写真家。University of Delhi 社会学修士、釜山慶星大学大学院写真学科、同大学大学院広告広報学後期過程、主な展覧会は 2020 年 2019 年「the Textured of the Light、and then」（トタトガギャラリー、cafe Eonga / 韓国釜山）、2019 年「釜山・ハンブルク作家交流展」（The Mark Museum / Hamburg Germany）、2019 年「韓国・ドイツ交流展」（漢城 1918 / 韓国釜山）、2018 年「Talk to」（南浦ギャラリー / 韓国釜山）、2018 年「the Textured of the Light、and then」（トタトガギャラリー / 韓国釜山）、2016 年「重層的に再現 - 山腹道路に住む」（space dot / 韓国釜山）、ほか。

写真に外形的な要素を抜き出すと最後に残るものは何だろう？私にとって写真の究極の疑問である。私の写真は、冷静に言い渡して大きな響きを産めば良いと思っている。写真を通して感じられる感動があるのであれば、それは「美」であることを望む。 <the Textured of the Light、and then> シリーズは、写真が、最終的に守るべきのことについて悩んだ結果である。フレームは、ミニマルに構成し、残りのスペースには、光を招待した。余白が目立てば良いだろう。私の写真なのか水墨画のか鉛筆画のか水彩画のか曖昧に見てくれれば良い。写真という媒体の可能性を拡大させるために、ひたすら光と露出のみ勝負をかける。これが創作なら深い共感と響きに近づいていくために、私の欲を取り除かなければならない。それしかないと光が私に教えている。





左 the texture of the light and then_ 写真_digital print fine art paper_80x53cm_2019
右 the texture of the light and then_ 写真_digital print fine art paper_80x53cm_2019

オ・ミンウク（OH Minuk）
現在釜山を拠点とする映像作家。釜山東義大学大学院新聞放送学科を卒業、主な作品は2019年 ドキュメンタリー「海峡」、2018年 ドキュメンタリー「夜景」、2015年 ドキュメンタリー「寂寞の景観」「梵殿」がある。

韓国の小説家である金承鈺氏が1964年に発表された長編小説『武進紀行』は存在しない空間に、存在の世界をモチーフにし書いた存在しない話である。この架空の話に登場する架空の空間「武進」の特徴を釜山の海岸地形を舞台に解釈した作品が［夜景］である。「二妓台と呼ばれる場所」には存在するが、存在しない寄生説話の話である。 闇が敷かれた都市に花火が上がる瞬間、二妓台の寄生説話中の幽霊が実存の世界に帰還する。この帰還により、原始性を秘め海岸地形を命名する寄生説話が過去を秘め歴史の幽霊が生きていく非可視的叙事－空間であると同時に、存在の世界を記述する体制の亡霊がでっち上げの噂であるという事実を暴露する。

夜景（Night Scene）_HD video_Stereo audio_18min 15sec_2018

ゾ・ジョンファン（CHO Jung hwan）

現在釜山を拠点とする美術作家。釜山東義大学建築学科卒業、釜山大学美術学科（洋画）卒業、ソウル弘益大学大学院絵画科を卒業、主な展覧会は 2019 年 個展「Melancholy Fantasia」（フランス文化院アートスペース / 韓国釜山）、2019 年 昌原青年アジア美術祭「アーティストの部屋」（昌原城山アートホール / 韓国昌原）、2019 年「画家と本」（ロボット プロイド / 韓国釜山）ほか。

新型コロナの影響により萎縮された経済活動は、むしろ人々の消費欲求をあおる結果に繋がった。このような時期に、人々は強い衝動を経験することになるだろう。コロナで疲れた体と心をなだめている場所が果たして安全だと誰も教えられない。まるでリゾートの風景のように穏やかな人々は、今後どのような災害が近づくか知らない。もしかすると、このすべての状況を予想しながらも、しっかり握りしめていた消費欲求を我慢できずに、そこで耐えているかもしれない。

IKEA wave_112.1x 145.5cm_Oil on canvas_2020

チョン・アルム（CHUN Arum）

現在釜山を拠点とする美術作家。韓国慶星大学美術学科（洋画）卒業、トタトガアーティスト（2010 年～ 2018 年）、主な展覧会は 2019 年 個展「チョン・アルム展」（釜山港国際旅客ターミナル 3 階 / 韓国釜山）、2019 年 個展「植木日記」（フランスの文化院 ART SPACE / 韓国釜山）、2017 年 個展「個展をする人」（ SPACE DOT/ 韓国釜山）、2019 年生命展「その何を探して」（釜山民主公園企画展示室 / 韓国釜山）、2019 年「画家と本」（ロボット プロイド / 韓国釜山）ほか。

AM I A TREE ？

私がちょっと考えてみたの！

水生植物

共通：考えが多く行動をしない人の姿を植物になぞらえ表現した作品である。

髪の毛は伸びていく枝のように、伸びていく考えを示し動かない木、植物などで人の受動性を示した。

左 私って木なの？（AM I A TREE）150x350cm_combined materials_2019

中 ちょっと考えてみたが（I'VE BEEN THINKING ABOUT IT）150x350cm_combined material 2019

右 水生植物（AN AQUATIC PLANT）_combined materials 204x36cm_2019

イム・ボンホ（IM Bongho）
現在釜山を拠点とする美術作家。主な展覧会は 2020 年 個展「カナタラマバサ」（ Open space bae / 韓国釜山）、2018 年 個展「()()()」（空間 him / 韓国釜山）、2016 年 個展「枝打ち;共に疲れる」（フランス文化院アートスペース / 韓国釜山）2020 年「個人らの社会」（釜山現代美術館 / 韓国釜山）、2019 年「釜山：その時もあったし今もある」（F1963 / 韓国釜山）、2019 年 河正雄青年作家招待展「光 2019」（光州市立美術館 河正雄美術館 / 韓国光州）、2019 年「あなたの一日を歓迎します」（水原市立アイパーク美術館 / 韓国水原）、2019 年「ポスト共同体 ing/1」（Suchang Youth Mansion / 韓国大邱）、2019 年「掛けたり、吊ったり、巻いたり」（Hong ti art center / 韓国釜山）、2018 年「アートを書く、本を描く」（慶北大学美術館 / 韓国大邱）、2018 年「若い視覚、新しい視線 2018」（釜山市立美術館 / 韓国釜山）ほか。

秋の日差しが当たる広安里ビーチはいつものように平穏な美しい景色だが、急に災害の通知音でなじみの日常は不慣れに変わる。
この作品は、公共安全のための装置を大衆が疲れていると感じた場合、あるいはそのような装置が行政の便宜のために変わる場合、果たして本来の目的と機能を持って維持することができるかについて疑問を共有するためである。

見知らぬ本日 _single channel video_24min15sec_2020